

# 教育活動が自尊感情に与える影響とその男女差

—— 都立専門高校生調査の分析から ——

笠井 友貴      須藤 康介

---

## 抄録

本稿は、東京都の専門高校生を対象に2008年に実施された質問紙調査をもとに、学校の教育活動が高校生の自尊感情に与える影響を計量的に分析し、自尊感情の規定要因を男女の違いを検討しつつ明らかにするものである。学校教育における活動として、授業内における対人的コミュニケーション、対物的コミュニケーション、そして授業外における自主的コミュニケーションが考えられる。本稿では、それらの代表として、「積極的に質問や意見を言える授業」「作業を通して何かを作り上げる授業」「生徒中心の行事準備」の三つが自尊感情に与える影響を追究した。

分析の結果、「積極的に質問や意見を言える授業」は、生徒の自尊感情を高め、そこに性別による差は見られなかった。「作業を通して何かを作り上げる授業」は、生徒の自尊感情を高めるが、それは男子のみに見られる傾向であり、「生徒中心の行事準備」は、生徒の自尊感情を高めるが、それは女子のみに見られる傾向であることが確認された。

このことから、授業内における対人的コミュニケーションは、性別を問わず生徒の自尊感情を高めるが、対物的コミュニケーションは女子を置き去りにし、また授業外における自主的コミュニケーションは男子を置き去りにする可能性が指摘できる。そして、ジェンダーによって社会的に「望ましい」とされる能力が異なるからこそ、自尊感情の規定要因に明確に男女差が見られたと考えられる。

## キーワード

自尊感情、教育活動、コミュニケーション、ジェンダー、専門高校

## 1. 問題関心

本稿の目的は、学校の教育活動が高校生の自尊感情に与える影響を計量的に明らかにすることである。具体的には、積極的に質問や意見を言える授業、作業を通して何かを作り上げる授業、生徒中心の行事準備という三つの教育活動に着目する。また、男女で社会的に望ましいとされる能力が異なるという先行研究の知見をふまえ、これらの教育活動が自

尊感情に与える影響の男女差についても検討する。

近年、日本の子どもたちの自尊感情の低さが問題視されている。内閣府が実施した「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」(2014)によると、「私は自分自身に満足している」と答えた若者(13~29歳)の割合は日本では45.8%で、70%を超える韓国・アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・スウェーデンよりも際立って低い。また、中央教育審議会(2007)の専門部会においても、子どもの自尊感情は家族や社会との関係性の中で育まれるため、社会との接点を意図的に作ることが必要であることが議論されている。それでは、自尊感情を向上させるための具体的な方策は何なのだろうか。太田(2013)が提唱するような、適切な形で「褒める」というのは、もちろん一つの方法だろう。しかし、教育困難校の学校改革を研究した菊地(2012)が論じるように、様々な学校の教育活動の中で、生徒たちが自然と自尊感情を身につけていくというプロセスも、明らかにする必要があるのではなかろうか。

以上の現状をふまえ、本稿では、環境として設定が可能である学校の教育活動が、生徒の自尊感情に与える影響について分析を行う。もちろん学校の教育活動と言っても多種多様であり、すべてを網羅的に分析することは不可能である。本稿では教育活動の中でも、積極的に質問や意見を言える授業、作業を通して何かを作りあげる授業、生徒中心の行事準備という三つに着目し、それぞれの効果を追究していく。というのも、後に述べるように、これらは授業内における対人的コミュニケーション、対物的コミュニケーション、そして授業外における自主的コミュニケーションという、学校教育における三つの側面にそれぞれ対応すると考えられるためである。

なお、これまで数多くのジェンダー研究によって、性別によって望ましいとされる能力が異なることが指摘されてきた。たとえば高橋・湯川(2008)は、男性は運動能力や理性が求められ、女性は他者への思いやりや協調性が求められる傾向があること、そしてこれらは、社会に存在するジェンダー規範に由来するものであることを論じている。

このような望ましいとされる能力の男女差は、自尊感情の規定要因にも男女差をもたらすだろう。なぜなら、自尊感情は自身が価値を認めている能力を発揮したときにこそ高まると考えられるからである。具体的に述べれば、たとえば運動能力を発揮することによって自尊感情が高まる(例:サッカーで活躍することで自尊感情が高まる)のは、運動能力の価値をより内面化している男子であり、協調性を発揮することによって自尊感情が高まる(例:友だちとのショッピングを摩擦なく楽しい雰囲気が進められることで自尊感情が高まる)のは、協調性の価値をより内面化している女子であると予想される。自尊感情の規定要因を分析する上で、性別は無視できない。

本稿の以下の構成を説明する。まず、第2節では、分析に使用するデータについて説明を行う。第3節では、本稿で検証する仮説の設定を行う。第4節では、分析に用いる変数の設定を行う。そして第5節ではクロス集計と重回帰分析を用いて、仮説の検証を行う。最後の第6節ではまとめと結論を述べる。

## 2. 使用データ

分析に用いるデータは、東京都の専門高校2年生を対象に2008年に実施された「東京都

の高校生の生活・意識・行動に関するアンケート」である<sup>(1)</sup>。調査対象は東京23区内の都立専門高校17校（工業科9校、商業科4校、農業科2校、その他の学科2校）と普通科高校3校であり、最終的な有効回答数は2830名であった。ただし、本稿で分析対象とするのは、その中でも専門高校の生徒データ2377名である。

分析対象を専門高校の生徒に限定する理由は二つある。第一に、本データにおいては普通科高校を3校しか調査しておらず、信頼性のある分析結果を得るには学校数が少なすぎる。また、専門高校と普通科高校を混合して分析すると、母集団（東京23区内の都立高校生）における両学科の生徒数比率と著しく異なるサンプルになってしまう。第二に、専門高校では多様な教育実践がなされているため、学校の教育活動が自尊感情に与える影響を見出すためのモデルケースとなり得る。普通科高校を分析対象とした場合、たとえば作業を通して何かを作りあげる授業自体が少ないため、その効果の抽出が困難であり、ひいては他の教育活動の効果との比較分析もできなくなってしまう。

なお、以下のすべての分析においては、分析サンプルにおける各学科の生徒数の比率が母集団の縮図となるように、ケースの重み付けを行っている。たとえば、商業高校生は本サンプルの中で24.0%存在するが、実際の母集団における商業高校生の比率は33.6%であるので、今回の調査では商業高校生の回収率が低いことになる。これを補うために、商業高校生を大きく重み付けし（たとえば1人を1.4人分として扱い）、代わり工業高校生などを小さく重み付けするといった処理を施している。このような重み付けを行うことで、学科（工業科、商業科など）による回収率の偏りなどを補正できる。

### 3. 仮説の設定

本稿で検証する仮説は七つである。まず、そのうちの四つを示す。

仮説1 男子は女子よりも自尊感情が高い。

仮説2 積極的に質問や意見を言える授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高い。

仮説3 作業を通して何かを作りあげる授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高い。

仮説4 行事の準備が生徒中心である学校の生徒ほど、自尊感情が高い。

仮説1は、男子は女子よりも自尊感情が高いという先行研究の知見を確認するものである。たとえば古荘（2009）は、「自尊感情は、時代、文化に左右されず、男性よりも女性が低い」(p.35) ことを指摘している。初めにこのことを確認する。

仮説2は「積極的に質問や意見を言える授業」が自尊感情に与える影響を検証するものである。この活動は、授業内での対人的コミュニケーションとして位置づけられる。授業内で自分の意思を表明できる機会があることは、教師や同級生に自己を承認してもらうことにつながると考えられる。土井（2014）が指摘するように、現代の若者の自尊感情にとって他者からの承認は非常に重要であるだろう。

仮説3は「作業を通して何かを作りあげる授業」が自尊感情に与える影響を検証するものである。この活動は、授業内での対物的コミュニケーションとして位置づけられる<sup>(2)</sup>。何かを作りあげる授業があることは、自身の能力を具現化する機会があることを意味すると

考えられる。速水（2008）が指摘するように、多くの場合、能力や個性は自身の内部にあって見えず、分からない。だからこそ不安なものである。しかし、それを物体として表出することで、能力や個性は可視化されるのではなかろうか。

仮説4は「生徒中心の行事準備」が自尊感情に与える影響を検証するものである。この活動は、授業外での自主的コミュニケーションとして位置づけられる。行事が教師主導である場合、生徒たちは自分たちだけでは課題を達成することができないということを「隠れたカリキュラム」として学んでしまうかもしれない。反対に生徒主体である場合、仮に失敗したとしても、自主的に課題を達成することは可能であるかもしれないと感じ、自尊感情の向上につながり得るのではなかろうか。これまで、荻谷（2002）をはじめ、子ども中心主義の「授業」の是非をめぐる数多くの議論がなされてきたが、一方で子ども中心主義の「学校行事」については、通説として効果は指摘されつつも、十分には実証されてこなかった。本稿は、このような研究の間隙を埋める意義も持つ。

以上の仮説2～4では、特に性別について考慮をしなかった。しかし、第1節で述べたように、男女では望ましいとされる能力に違いがあり、そこから教育活動と自尊感情の関係にも違いが生じているはずである。このことを考慮した仮説が以下の三つである。

仮説5 性別にかかわらず、積極的に質問や意見を言える授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高い。

仮説6 男子では、作業を通して何かを作りあげる授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高いが、女子では、作業を通して何かを作りあげる授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高いとは言えない。

仮説7 女子では、行事の準備が生徒中心である学校の生徒ほど、自尊感情が高いが、男子では、行事の準備が生徒中心である学校の生徒ほど、自尊感情が高いとは言えない。

仮説5は「積極的に質問や意見を言える授業」が自尊感情に与える影響の男女差を検証するものである。仮説2では、当該授業が教師や同級生に自己を承認してもらうことにつながり、自尊感情を向上させる可能性を示唆した。授業中における他者からの承認が重要であることは、男子も女子も同じであるので、当該授業は男女ともに効果を及ぼすと予測する。もちろん、氏原（2011）などによって、男子のほうが女子より授業中の発言数が多いことが指摘されているが、「積極的に質問や意見を言える授業」は、男子にとっては自己顕示をよりできるようになり、女子にとっても発言数が抑圧された状態からの解放となるため、両者ともに効果が見られるのではなかろうか。

仮説6は「作業を通して何かを作りあげる授業」が自尊感情に与える影響の男女差を検証するものである。第1節で述べたように、男女では望ましいとされる能力が異なる。その一つとして、男子は女子よりも、工作能力が社会から暗黙に要請される傾向が強いのではなかろうか。ベネッセ教育総合研究所の「第2回 子ども生活実態基本調査」(2010)によれば、将来なりたい職業について、男子小学生では4位、男子中学生では10位に「大工」が挙げられているのに対して、女子では完全にランク外である。職業展望が曖昧な小中学生の段階から、工作は男子に向いているという規範が浸透していることが窺える。したがって、作業を通して何かを作りあげる授業は、特に男子にとって、望ましいとされる工作

能力を表出する機会となり、自尊感情を高めると予測する。

仮説7は「生徒中心の行事準備」が自尊感情に与える影響の男女差を検証するものである。木村（1999）によれば、男性は熟達領域（特定の知識・技能を身につける領域）での成功、女性は対人領域（他者とコミュニケーションを行う領域）での成功を重視するように社会化を受けている。このことから、対人能力を望ましい能力と見なす傾向は女子で強く、ゆえに対人能力を発揮することで得られる自尊感情も女子で大きいと考えられる。したがって、生徒中心の学校行事という、主体的な対人能力を発揮する機会がある活動を通して自尊感情を高めるのは、特に女子であると予測する。換言すれば、友だちとショッピングを行うことによる充足と類似のものを、女子は生徒中心の学校行事によって得ている側面があるのではないかという仮説である。

#### 4. 変数の設定

分析に使用する変数は、以下のように設定した。

- ① 自尊感情 … 「自分に自信がある」「自分には人よりすぐれたところがある」「自分は人の役に立てると思う」にあてはまるかどうかを尋ねる質問（4件法）を合算した。信頼性を表すアルファ係数は0.791である。クロス集計では「高い」「低い」に二分割し、重回帰分析では1～10の値をとり、数値が大きいほど自尊感情が高い量的変数とした。
- ② 積極的に質問や意見を言える授業 … 「積極的に質問や意見を言える授業」の頻度を尋ねる質問を用いた。クロス集計では「ほとんどすべて」「半分より多い」を「多い」、「半分くらい」を「半分」、「半分より少ない」「ほとんどない」を「少ない」とし、重回帰分析では1～5の値を割り当て、数値が大きいほど頻度が多い量的変数とした<sup>(3)</sup>。
- ③ 作業を通して何かを作りあげる授業 … ②と同様に設定した。
- ④ 行事の準備は生徒中心 … 学校行事について「話し合いや準備は生徒が中心になって進める」にあてはまるかどうかを尋ねる質問を用いた。この質問は生徒ではなく学校に調査したものである。クロス集計では「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」とした。重回帰分析では「あてはまる」を1、「あてはまらない」を0とするダミー変数とした。
- ⑤ クラス内成績 … クラス内成績を尋ねる質問に対して、「下のほう」～「上のほう」に1～5の値を割り当てた。この変数は重回帰分析でのみ統制変数として用いる。
- ⑥ 友人数 … 学校内外の友人数を尋ねる九つの質問に対して、選択肢の範囲の中間値を割り当てて合算した<sup>(4)</sup>。この変数は重回帰分析でのみ統制変数として用いる。
- ⑦ 家庭蔵書数 … 家にある本の冊数を尋ねる質問に対して、「ほとんどない」を0、「20冊くらい」を0.2、「50冊くらい」を0.5、「100冊くらい」を1.0、「200冊くらい」を2.0、「300冊くらい」を3.0、「400冊以上」を4.5に割り当てた。つまり、百冊単位の実数に置き換えた。この変数は重回帰分析でのみ統制変数として用いる。

重回帰分析において成績・友人数・蔵書数を分析に投入するのは、須藤（2009）において、それらが自己有能感（自尊感情）に影響を与えることが示されているからである。こ

れらが自尊感情に与える影響を統制する（統計的に取り除く）ことで、教育活動が自尊感情に与える真の効果に接近できると考えられる。

## 5. 分析結果

本節では、まずクロス集計によって仮説を検証し、次に重回帰分析によって仮説を再検証する。二つの手法を併用することで、分析結果のリアリティと信頼性を担保する。

### 5. 1. クロス集計

この項では、クロス集計によって仮説1～7を検証する。まず、仮説1～4の検証結果を表1～4に示す。

表 1 性別と自尊感情の関係

		自尊感情		合計	有効度数
		高い	低い		
性別	男子	44.8%	55.2%	100.0%	(1289)
	女子	33.5%	66.5%	100.0%	(991)
合計		39.9%	60.1%	100.0%	(2280)
独立性のカイニ乗検定		p=0.000			

表 2 「積極的に質問や意見を言える授業」と自尊感情の関係

		自尊感情		合計	有効度数
		高い	低い		
積極的に 質問や意見を 言える授業	多い	50.8%	49.2%	100.0%	(516)
	半分	40.2%	59.8%	100.0%	(881)
	少ない	33.9%	66.1%	100.0%	(879)
合計		40.2%	59.8%	100.0%	(2276)
独立性のカイニ乗検定		p=0.000			

表 3 「作業を通して何かを作りあげる授業」と自尊感情の関係

		自尊感情		合計	有効度数
		高い	低い		
作業を通して 何かを作り あげる授業	多い	47.8%	52.2%	100.0%	(510)
	半分	39.4%	60.6%	100.0%	(668)
	少ない	37.2%	62.8%	100.0%	(1110)
合計		40.2%	59.8%	100.0%	(2288)
独立性のカイニ乗検定		p=0.000			

表 4 「行事の準備は生徒中心」と自尊感情の関係

		自尊感情		合計	有効度数
		高い	低い		
行事の準備は 生徒中心	あてはまる	42.4%	57.6%	100.0%	(1342)
	あてはまらない	36.9%	63.1%	100.0%	(985)
合計		40.1%	59.9%	100.0%	(2327)
独立性のカイニ乗検定		p=0.007			

表1は、仮説1「男子は女子よりも自尊感情が高い」を検証しているものである。表1を見ると、先行研究と同じく、男子のほうが女子よりも自尊感情が高いという結果が確認された。したがって、仮説1は支持された。

表2は、仮説2「積極的に質問や意見を言える授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高い」を検証しているものである。表2を見ると、当該授業が多いほど、生徒の自尊感情が高いことが分かり、仮説2は支持された。授業内で自分の意思を表明できる機会があることは、教師や同級生に自己を承認してもらうことにつながるのだろう。

表3は、仮説3「作業を通して何かを作りあげる授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高い」を検証しているものである。表3を見ると、当該授業が多いほど、生徒の自尊感情が高いことが分かり、仮説3は支持された。何かを作りあげることが能力や個性を表現する機会となり得ることが示唆される。

表4は、仮説4「行事の準備が生徒中心である学校の生徒ほど、自尊感情が高い」を検証しているものである。表4を見ると、生徒中心の行事準備をしている学校ほど、生徒の自尊感情が高いことが分かり、仮説4は支持された。生徒主体で何かに取り組むことが、自尊感情の向上につながり得るのではなかろうか。

次に、仮説5～7の検証結果を表5～7に示す。

表5 性別ごとの「積極的に質問や意見を言える授業」と自尊感情の関係

性別			自尊感情		合計	有効度数
			高い	低い		
男子	積極的に 質問や意見を 言える授業	多い	57.3%	42.7%	100.0%	(293)
		半分	44.5%	55.5%	100.0%	(501)
		少ない	36.9%	63.1%	100.0%	(464)
	合計		44.7%	55.3%	100.0%	(1258)
	独立性のカイ二乗検定		p=0.000			
女子	積極的に 質問や意見を 言える授業	多い	40.6%	59.4%	100.0%	(212)
		半分	34.2%	65.8%	100.0%	(366)
		少ない	29.9%	70.1%	100.0%	(398)
	合計		33.8%	66.2%	100.0%	(976)
	独立性のカイ二乗検定		p=0.029			

表6 性別ごとの「作業を通して何かを作りあげる授業」と自尊感情の関係

性別			自尊感情		合計	有効度数
			高い	低い		
男子	作業を通して 何かを作り あげる授業	多い	53.6%	46.4%	100.0%	(323)
		半分	44.5%	55.5%	100.0%	(398)
		少ない	40.3%	59.7%	100.0%	(548)
	合計		45.0%	55.0%	100.0%	(1269)
	独立性のカイ二乗検定		p=0.001			
女子	作業を通して 何かを作り あげる授業	多い	37.6%	62.4%	100.0%	(178)
		半分	30.8%	69.2%	100.0%	(253)
		少ない	33.6%	66.4%	100.0%	(544)
	合計		33.6%	66.4%	100.0%	(975)
	独立性のカイ二乗検定		p=0.338			

表 7 性別ごとの「行事の準備は生徒中心」と自尊感情の関係

性別			自尊感情		合計	有効度数
			高い	低い		
男子	行事の準備は 生徒中心	あてはまる	45.3%	54.7%	100.0%	(811)
		あてはまらない	44.1%	55.9%	100.0%	(478)
	合計		44.8%	55.2%	100.0%	(1289)
	独立性のカイニ乗検定		p=0.371			
女子	行事の準備は 生徒中心	あてはまる	37.1%	62.9%	100.0%	(501)
		あてはまらない	29.9%	70.1%	100.0%	(491)
	合計		33.6%	66.4%	100.0%	(992)
	独立性のカイニ乗検定		p=0.010			

表5では、仮説5「性別にかかわらず、積極的に質問や意見を言える授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高い」を検証している。表5を見ると、男子で関連がやや大きいものの、男女ともに当該授業が多いほど自尊感情が高い。よって仮説5は支持された。積極的に質問や意見を言える授業は、生徒全体の自尊感情の向上につながり得る。

表6では、仮説6「男子では、作業を通して何かを作りあげる授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高いが、女子では、作業を通して何かを作りあげる授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高いとは言えない」を検証している。表6を見ると、男子のみで、当該授業が多いほど自尊感情が高いと言えることが分かる<sup>(5)</sup>。よって仮説6は支持された。自尊感情が女子で低いという分析結果が表1で示されたが、作業を通して何かを作りあげる授業はその男女差を拡大させる側面がある。

表7では、仮説7「女子では、行事の準備が生徒中心である学校の生徒ほど、自尊感情が高いが、男子では、行事の準備が生徒中心である学校の生徒ほど、自尊感情が高いとは言えない」を検証している。表7から、女子のみで、生徒中心の行事準備をしているほど自尊感情が高いと言えることが分かる。よって仮説7は支持された。生徒中心の行事準備は自尊感情の男女差を縮小させる側面がある。

## 5. 2. 重回帰分析

これまでのクロス集計によって、仮説1～7はすべて支持された。しかし、クロス集計だけでは、観察された変数間の関連が擬似相関である可能性が否定できない。たとえば、クラス内成績が高い生徒ほど「積極的に質問や意見を言える授業」が「あった」と感じやすく、また、クラス内成績が高い生徒ほど自尊感情が高いため、「積極的に質問や意見を言える授業」と自尊感情の間に擬似的な関連が生じている（直接的な因果関係はない）という可能性がある。そこでこの項では、重回帰分析を行い、教育活動どうしの互いの影響やその他の要因の影響を統制した上での、各教育活動が自尊感情に与える影響を見出す。表8と表9が重回帰分析の結果である<sup>(6)</sup>。

まず、表8の分析結果を見ると、自尊感情の規定要因として先行研究で挙げられていた成績・友人数・蔵書数の影響を統制しても、本稿で扱った三つの教育活動が自尊感情の向上に寄与していることが分かる。つまり、仮説2～4は改めて支持される。

表 8 自尊感情の規定要因（重回帰分析）男女計

	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
女子ダミー	-0.473	-0.107	***
クラス内成績	0.364	0.209	***
友人数	0.016	0.161	***
家庭蔵書数（百冊単位）	0.116	0.053	**
積極的に質問や意見を言える授業	0.188	0.092	***
作業を通して何かを作りあげる授業	0.079	0.041	+
行事の準備は生徒中心ダミー（定数）	0.171	0.039	+
	1.962		***
有効度数	2196		
決定係数	0.107		
回帰のF検定	p=0.000		

\*\*\* p&lt;0.001 \*\* p&lt;0.01 \* p&lt;0.05 + p&lt;0.1

表 9 自尊感情の規定要因（重回帰分析）男女別

	男子			女子		
	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
クラス内成績	0.289	0.161	***	0.431	0.263	***
友人数	0.021	0.209	***	0.009	0.093	**
家庭蔵書数（百冊単位）	0.085	0.041		0.144	0.062	*
積極的に質問や意見を言える授業	0.227	0.106	***	0.145	0.076	*
作業を通して何かを作りあげる授業	0.121	0.059	*	0.007	0.004	
行事の準備は生徒中心ダミー（定数）	-0.003	-0.001		0.384	0.093	**
	1.877		***	1.711		***
有効度数	1234			962		
決定係数	0.103			0.097		
回帰のF検定	p=0.000			p=0.000		

\*\*\* p&lt;0.001 \*\* p&lt;0.01 \* p&lt;0.05 + p&lt;0.1

次に男女別の分析結果である表9を見てみよう。積極的に質問や意見を言える授業は男女ともで、作業を通して何かを作りあげる授業は男子のみで、生徒中心の行事準備は女子のみで、自尊感情の向上につながっている。このことから、仮説5～7も改めて支持される。なお、行事の準備は生徒中心ダミーの回帰係数が男子でほぼゼロ、作業を通して何かを作りあげる授業の回帰係数が女子でほぼゼロであるので、自尊感情の規定要因が男女で大きく異なることが分かる。

## 6. まとめと結論

本稿で得られた主な知見は次の三点である。第一に、授業内の対人的コミュニケーションである「積極的に質問や意見を言える授業」は、生徒の自尊感情を高め、その効果に性別による差はあまり見られない。第二に、授業内の対物的コミュニケーションである「作業を通して何かを作りあげる授業」は、生徒の自尊感情を高めるが、それは男子のみに見られる傾向である。第三に、授業外の自主的コミュニケーションである「生徒中心の行事準備」は、生徒の自尊感情を高めるが、それは女子のみに見られる傾向である。

これらの知見から、大きく分けて二つのインプリケーションを導くことが可能である。

第一のインプリケーションは、教育活動によって自尊感情を高めることを目指すのであれば、積極的に質問や意見を言える授業、作業を通して何かを作りあげる授業、生徒中心の行事準備は有効だろうということである。ただし、少なくとも自尊感情の涵養という観点では、作業を通して何かを作りあげる授業は女子を置き去りにしがちであり、生徒中心の行事準備は男子を置き去りにしがちであることには留意する必要がある。その点、積極的に質問や意見を言える授業は、その効果の普遍性が注目される。自尊感情以外のアウトプットをふまえつつ、教育活動を取捨選択することが求められる。

第二のインプリケーションは、男女で社会的に「望ましい」とされる能力が異なるというジェンダー研究の知見は、高校生の自尊感情についても十分に妥当するということである。男子は工作能力のようなものが暗黙に要請され、女子は対人能力のようなものが暗黙に要請されるということは、これまでの研究でも指摘されてきたことである。しかしそのことで、自尊感情の規定要因が男女で明確に異なるという知見は注目に値する。子どもたちはすでに高校段階において、社会のジェンダー規範に強く規定され、自身を評価していると推測される。高校生の自尊感情の規定要因構造を、性別によらない単一のものとして議論を進めてしまうことには、無理がある。

もちろん、本稿にはいくつもの課題が残されている。本稿では、自尊感情の規定要因として三つの教育活動を分析したが、他の活動について分析する余地は多分にある。また、今回は前述した理由により、分析対象を東京都の専門高校生としたが、他の地域ではどうなのか、普通科高校ではどうなのか、小中学校ではどうなのか、可能な限り分析する必要があるだろう。引き続き、積み残した課題に応えていきたい。

#### <注>

- (1) この調査は東京大学教育学部の授業「教育社会学調査実習」の一環として、ベネッセ教育研究開発センターの協力のもと、本田由紀を研究代表に行われたものである。調査の主な目的は、専門高校の意義と課題を明らかにすることであった。調査の詳細は『都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査』(2010)に記載されている。
- (2) 一般に「コミュニケーション」と言うと、対人的コミュニケーションが想起され、対物的コミュニケーションというカテゴリに違和感があるかもしれない。しかし、学校教育の中では、生徒が教材・教具に向き合うことで、何かを学んだり発見したり、あるいは自己の価値観を形成したりすることは無視できない要素として存在する。そこで本稿では、「コミュニケーション」を広義に捉え、授業内の活動として、対人的コミュニケーションと対物的コミュニケーションが存在するという立場を取る。
- (3) この質問項目はあくまで生徒の主観に依存して尋ねたものであるので、教師が意図したカリキュラムとは異なる可能性がある。もっとも、教師が意図しても、生徒が主観として実感できなければ、その授業が実践されているとは見なせないとも考えられるので、生徒の回答から教育活動を定義することには、一定の妥当性があるだろう。
- (4) 友人数は、クラス、部活動、委員会活動、その他学校内、小・中学校、塾や予備校、アルバイト先、インターネット、その他学校外に区別して、それぞれ7件法で尋ねている。「いない」は0、「1～3人」は2、「4～6人」は5、「7～9人」は8、「10～12人」は11、「13人～」は15、「入っていない」は0として計算した。
- (5) ただし、学科別に分析すると、工業科では、女子においても、「作業を通して何かを作りあげる授業を受けている生徒ほど、自尊感情が高い」という結果が得られた。これは、工業科に進学する女子はジェンダー規範をそれほど内面化していないためと考えられる。
- (6) 重回帰分析で使用する変数の記述統計量は、以下の表10である。

表 10 重回帰分析で使用する変数の記述統計量

	有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
自尊感情	2326	1.000	10.000	4.210	2.190
女子ダミー	2331	0.000	1.000	0.440	0.496
クラス内成績	2356	1.000	5.000	2.750	1.254
友人数	2359	0.000	135.000	36.450	22.821
家庭蔵書数(百冊単位)	2357	0.000	4.500	0.617	1.009
積極的に質問や意見を言える授業	2321	1.000	5.000	2.780	1.064
作業を通して何かを作りあげる授業	2336	1.000	5.000	2.610	1.132
行事の準備は生徒中心ダミー	2377	0.000	1.000	0.580	0.494

#### <参考文献>

- 氏原陽子 2011 「隠れたカリキュラムによるジェンダー・メッセージの伝達に関する研究」『名古屋女子大学紀要』 第57号 pp.151-160.
- 太田肇 2013 『子どもが伸びる ほめる子育て— データと実例が教えるツボ』 ちくま新書。
- 荻谷剛彦 2002 『教育改革の幻想』 ちくま新書。
- 菊地栄治 2012 『希望をつむぐ高校 — 生徒の現実と向き合う学校改革』 岩波書店。
- 木村涼子 1999 『学校文化とジェンダー』 勁草書房。
- 須藤康介 2009 「自己有能感の規定要因についての考察 — 学歴実力主義との関係に注目して」『子ども社会研究』 第15号 pp.137-148.
- 高橋恵子・湯川隆子 2008 「ジェンダー意識の発達 — 男らしさもつくられる」 柏木恵子・高橋恵子編『日本の男性の心理学 — もう1つのジェンダー問題』 有斐閣 pp.53-73.
- 中央教育審議会 2007 「豊かな心をはぐくむ教育の在り方に関する専門部会 (平成19年10月15日)」 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/019/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/019/))。
- 土井隆義 2014 『つながりを煽られる子どもたち— ネット依存といじめ問題を考える』 岩波ブックレット。
- 東京大学教育学部比較教育社会学コース・ベネッセ教育研究開発センター編 2010 『都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査』 ベネッセコーポレーション。
- 内閣府 2014 「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」 ([http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf_index.html))。
- 日本青少年研究所編 2009 『中学生・高校生の生活と意識 — 日本・アメリカ・中国・韓国の比較』 財団法人日本青少年研究所。
- 速水健朗 2008 『自分探しが止まらない』 ソフトバンク新書。
- 古荘純一 2009 『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』 光文社新書。
- ベネッセ教育総合研究所編 2010 『第2回子ども生活実態基本調査報告書』 ベネッセコーポレーション。

#### <付記>

本論文は、笠井友貴が東京大学教育学部2008年度「教育社会学調査実習」の授業で提出したレポート「コミュニケーションに関わる教育活動が自己効力感に与える影響」を、須藤康介が加筆・修正し、共同で校正したものである。